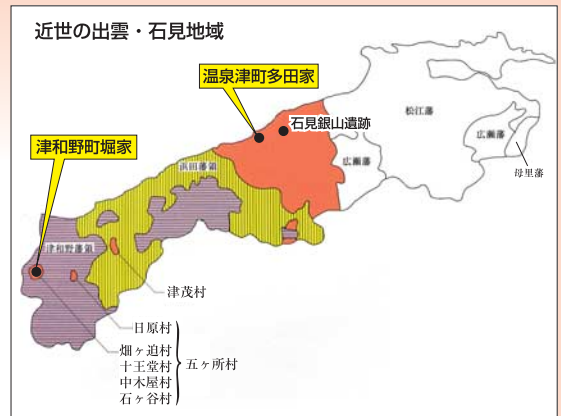


■ 文献調査

石見銀山の開発は、たくさんの銀を産出したというだけでなく、周辺の経済へ影響を与え、また銀山に人口が集中することによって消費・流通、文化などにも影響を及ぼしたと考えられています。古文書調査ではそれらを具体的に明らかにすることを目的としているので、調査の対象は広範囲になります。

今年度の県内古文書調査は、津和野町の堀家や温泉津町の多田家など、石見銀山に間接的に関わりのある場所で行いました。



堀家住宅

享保18年(1733)に焼失し、天明5年(1785)に再建されました。現在「堀庭園」として一般公開されています。

● 津和野町堀家調査

堀家は現在、一般公開されている「堀庭園」として知られています。徳川家康が慶長5年(1600)に石見国(現在の石見地方)を掌中に収め、その後元和3年(1617)に津和野藩が成立しましたが、日原町・鹿足郡畑ヶ追村など5ヶ村にまたがる笹ヶ谷鉱山は銀山御料として幕府の支配下に置かれました。

笹ヶ谷鉱山は銅山師13人によって経営されましたが、やがて明治時代には堀家が経営を引継いだので、鉱山関連の古文書が堀家に遺っています。家屋が享保18年(1733)に焼失したため残っている古文書はそれ以降のものがほとんどですが、鉱山経営の実態を探る格好の史料といえるでしょう。



マイクロカメラでの撮影風景。マイクロフィルムはロール状になっていて、500~600カットの写真が撮れるので古文書撮影に適しています。

● 温泉津町多田家調査

温泉津町の温泉津港は、江戸時代には北前船の寄港地であり、銀山への物資はここから水揚げされました。

客船を扱う回船問屋は十数軒あったようですが、多田家もそのうちの一軒で、屋号を油屋といいます。

温泉津に入荷される物資には水上役(通関税)がかけられましたが、その品目と数量などを報告した史料などもあり、これらの史料から温泉津や銀山でどのような物資が消費されたかが分かります。



現在の温泉津港。温泉津町は港町、温泉町として16世紀頃から栄えていました。

● 歴史文献のデータベース化

これまで島根県内だけでなく、県外の鉱山や中国・朝鮮・ヨーロッパの「銀」関係史料など広範囲に調査を行ってきました。これまで収集した膨大なデータは「石見銀山歴史文献検索システム」として、データベース化を準備中です。史料の年代や所在、翻訳や読み下し文などの情報をパソコン画面上で見ることができ、見たい史料を瞬時に検索できる便利なシステムです。

